現代日本との接点を論じる。

第二部「不老長寿物語」は「不老長寿の食べ物」「桃」「菊」「橘」「酒」「朱」「霊芝」「煎じ薬のルーツ」「胞衣壺」「勾玉」「薬」「僧医と看病禅師」「医薬の神々」「常世の神」「まとめ」の全十五章による構成で、かつて仙薬として珍重されていた薬物にまつわるエピソードとその効能について論じ、またそれに関連する史跡を紹介する。

本書が対象としている領域は、これまでにも歴史・宗教・民俗・国文の人たちによる研究の蓄積があり、本書は特に目新しい論点や材料を提供しているわけではない。肩の凝らない読物、誌上の楽しい散策といった感じである。本書によってこの分野に興味を覚えた方への道しるべとして、巻末に参照・参考文献の一覧がほしいところである。

（新村　拓）

〔集英社：東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇、電話〇三―三二三〇―六一四一、平成十年十二月、四六判、二六八頁、本体一、九〇〇円〕

安川里香子著

『森鷗外「北游日乗」の足跡と漢詩』

ひとことで言えば本書は、森鷗外の『北游日乗』の詳細な注釈である。『北游日乗』とは、明治十五年二月十三日から三月二十九日にかけて、二一歳の軍医副・森林太郎が徴兵検査に立ち合いのために群馬・長野を経て新潟各地をまわる旅中、漢文体で記した日記で二八首の漢詩（七言絶句）をふくむ。ところでそもそも注釈とは何であるか、本書はいかなる性格をもった注釈であるのか。

本書の扉に「長谷川泉先生　蒲原宏先生　故小島憲之先生　に捧げる」という献辞が記されている。印象的であるとともに、本書が内蔵している三つの性格をよく象徴してもいる。長谷川泉氏は日本近代文学研究の第一人者であり、学術雑誌『鷗外』を機関誌として発行して事務局を鷗外旧宅趾の本郷区立鷗外図書館内におく森鷗外記念会の会長として知られる。本書も同誌五九・六〇・六一・六二（平成八年七月～同十年一月）にわたった連載稿に加筆訂正して成ったものである。本書第一の性格として、『北游日乗』という言語表現を通した青年鷗外の精神世界の照射という点がまずあげられる。従来、鷗外漢詩に関する先行研究やこの作品に関する専論も皆無ではないが、汗牛充棟の鷗外研究の中にあってはそれでも比較的研究のたち後れている作品に属するのではあるまいか。その作品が以下に述べる詳細な語釈・注釈と平易な訳文を得て近づき易い形で提供されたことは、歓迎すべきことである。

次にわが日本医史学会の理事長・蒲原宏氏については、今更述べるまでもないが、国内外の医学史を網羅する該博な造詣に加えて、郷土・新潟の医学史の知識は他の追随を許さない。本書が、蒲原氏の郷土史・医学史の知識を存分に享受して成り立っていることは一読にして了解されるところである。ある意味で歴史はすべて地方史である。各地方の各種の

条件下に成立した歴史的事実の正確な把握をおろそかにしてはならない。本書の詳細な資料調査・実地踏査はそうした著者の姿勢を物語るものであろう。ただし、全体として見るとき断片的事実の集積にとどまって、それを歴史的に通観し統合する側面がやや不足している嫌いはないか。明治十年代の諸制度揺籃期に、学制・軍制・医療制度がどのように整備されていったか、そしてその社会全体の枠組の中で個人はいかに規定されていったかといった視点が必要なのではないか。さすれば日乗はさらに立体感を増したのではないか。日頃私自身区々たる調査に汲々としているので、自戒の意をこめて敢えて一言する。

第三に、小島憲之氏は日本漢詩文研究の権威であり、特に平安朝の漢詩文を専攻し、日本上代・中古文学と中国中世（六朝～唐末）文学との比較研究に一時代を画したが、江戸・明治の漢詩文と中国近世文学にも精通し、鷗外文学にも高い関心を示し、鷗外語彙が中国近世俗語小説や日本近世漢詩文の強い影響下にあることを指摘した。本書の漢詩の語釈にみる綿密な用語例の提示は、作者の用語の典拠を確定することを通して、創作意図に即した厳密な解釈を施し、且つ読書範囲・傾向を知りその言語世界に迫ろうとする小島氏の手法をうけつぎ、本書の一大特色をなす。

最後に、著者は現在、『後北游日乗』（明治十五年九月二十七日～十六年二月七日）の注釈に着手し、その第一報「『後北游日乗』の漢詩(1)――旅立ち前後の詩――」（『鷗外』六四、平成十一年一月）をすでに発表している。著者の弛まぬ精進に称賛の意を表するとともに、近い将来の完結を期待したい。

（町　泉寿郎）

〔審美社：〒113-0033東京都文京区本郷五―一―五、電話〇三―三八一五―四一五三、平成十一年二月十日、四六判、二三六頁、本体三、〇〇〇円〕

山田慶兒著

『中国医学はいかにつくられたか』

著者、山田慶兒氏は、京大人文科学研究所の中国科学史班、国際日本文化研究センターでの私の恩師である。山田先生は京大理学部天文学科の御出身で、広汎な科学史に取り組まれ、『朱子の自然学』『混沌の海へ―中国的思考の構造』『夜鳴く鳥―医学、呪術・伝説』『授時暦の道』『科学と技術の近代』『制作する行為としての技術』『本草の夢と錬金術と』『黒い言葉の空間―三浦梅園の自然哲学』『復元水運儀象台』、共同研究の編著としては、『歴史の中の病と医学』など多数の御著書がある。

一九九七年日文研を定年退官されて、過去四十年間の中国医学に関する研究、文献の読みこみの成果を一本にまとめられた。これが間もなく上梓される「中国医学の起原」である。「中学医学はいかにつくられたか」という今回の出版は、いうなれば、ダイゼスト版である。しかし単なるダイゼストではなく、強調すべき点は、強烈な筆致で述べられている。著